



## 文

学とは何か。とりわけ純文学とは何か。こうした問いに答えることは、近年ますます困難となりつつあるように感じられる。もちろん、文学なんて興味ないよ、純文学なんて知らない、ということであれば、どうでもいいような話であるし、じつさい、そうであったとしても生活に困ることは、ほとんどないだろう。しかしながら、今なお、マンガやアニメ、映画や音楽、テレビ・ドラマやゲームなどのサブ・カルチャー表現における、いくつかの作品を好意的にレビューするさい、「文学的」という形容が用いられているケースを、目に耳にする機会は、多い。このとき、そうした修辭の背後にイメージされているものとは、おそらく、洋邦を問わず古典的な名作とされる小説群か、そうでなければ、一般的に芥川賞という権威に象徴される「何か」なのではないか。いうまでもなく、芥川賞は、純文学の新人に与えられる、ということになっていく。また、古典的な名作に分類されるものほとんどは、エンターテインメントのジャンルとは峻別したうえで、語られがちである。つまり、この、エンターテインメントとの境を為すための「何か」こそが、文学あるいは純文学といわれるものの基軸なのだと思われる。

もちろん、純文学とは、教科書的にいうなら、この国の近代以降における私小説や自然主義を前提に、さまざまな試行錯誤を繰り返しつつ、大衆におもねることなく、リアリズムを追求していたの小説云々、の解説は可能である。が、しかし現代において、それはもはや厳密ではない。たとえば小谷野敦は、その著作『反II文藝評論文壇を遠く離れて』に収められた文章(01年)のなかで、直木賞作家である藤堂志津子の書くリアリズムを高く評価し、(奇妙なことだが、通説では日本の「純文学」は、自然主義の全盛とともに、痛

烈な現実を描く作品を、美化された虚構作品から区別して生まれた概念だとされているのに、山崎豊子、城山三郎、松本清張らが登場したところから、この構図は崩れ、むしろ「純文学」と呼ばれるもののほうがロマンティックになってゆく。なにかまず、80年代以降の、中上健次、村上春樹、高樹のぶ子、江國香織、吉本ばななといった作家たちにおいてそうである。中上の『軽蔑』のヒロインなど、藤堂作品を読んだあとではバカに見える」といつている。

ここで、小谷野が指摘しているリアリズムの質は、男女の関係に深く関わるものであるが、しかし、中上健次や村上春樹、高樹のぶ子、江國香織、そして吉本ばななの作品に、恋愛ないし性愛を扱ったものが、けっしてすくなくはない以上、むしろ、そのなかでリアリズムをどう捉まえるかの意識や技法こそを問うている、と考えるべきであろう。当然、これに反証して、いや、以前までとはリアリズムといった概念そのものが変容したのだ、ということも可能である。したがって、意識や技法が変化すること自体は自然な流れで、そうした流れを受け、今日の純文学は成り立っている、ということもできる。だが、そうであるならば逆に、過去と現在とでは、純文学を純文学たらしめる条件にも違いが生じてくるのではないか。

純文学作家、と笹野頼子は自らを名乗る。『ドン・キホーテの「論争」』(99年)によれば、98年から笹野は(意図的に)純文学作家と名乗っている」ということになっている。理由は(一九九八年四月十六日付けの読売新聞夕刊で文芸ノート(略)という記事を見た事から、一年以上続いたこの不発の「論争」を笹野がはじめたことにある。時代背景をいえば、読み手イコール売り上げの減少から純文学というジャンルは不要だとの声がつよく、せめて純文学のイメージを刷

新すべくJ文学というラベルへの張り替えが盛んだっつ頃で、そうした状況に対し、笹野は憤り、「ある時点で、純文学とは、「私小説と心境小説である」という狭い定義が与えられたのだ。無論それだけでなく純文学の大きな部分を今でもフォロワーは出来るだろうが、そのままで今の時代を正直に反映し変容した部分は入りきらないのだ。つまり最先端であろう柔軟であろうとする純文学の、非常に大切な部分を取り落とされてしまふ。そこに問題がある」として、80年代以降の純文学が「私小説と心境小説である」以外のアプローチに達し、さらには旧い文学の価値観から離れていったことを必然とし、それでも「現状を表す強い言葉が出て来ない限り、純文学という言葉を意識的に使う。基本的に、新しい言葉をどういふ試みは今の時点では難しいと思う。新しい語はインキきな定義を押しつけられ易く、純文学という言葉よりも弱いのではないか。歴史性を背負ったものであれば、動かす事にもある力量と専門知識がいる。抑圧に抵抗する時も立場をはっきりとさせ易く思う」というふうには、あえて自らを純文学作家と位置づけたのである。

笹野の主張の、その根底にあるのは、おそらく、大勢に受け入れられること、すなわちメガ・ヒットを産出することが、必ずしも文学の正義ではない、ということであろう。そうではなくて、そこからこれ落ちるものをこそ、純文学はすくい上げなければならぬ、といっているようにさえ、『ドン・キホーテの「論争」』を読むかきりでは、思える。（純文学の定義とヒットはもともとないのだ。というかずと昔に大衆文学が台頭しヒットし始めた頃、それに対抗する概念として純文学という言葉は本格的に出てきたのだと言われている。但し対抗すると言っても大衆文学に対立しなければ存在し

得ないという意味ではない。商業主義や娯楽中心主義、その時代の  
大衆の狭い共通認識、そういうものに対する危機感と自覚から自分  
達の書いているものがそれと違うと表明したという事なのではない  
か」と笹野は述べる。しかしながら、もちろんこれだけでは、純文  
学とは何か、そこに内包されているものを、十分には教えてくれな  
い。いや、そもそも純文学に含有される「何か」が何であるかは教  
えられるか、という問題が残る。もしもかすると、それは抽象的なイ  
メージであるがゆえに、ある種の普遍性を持ちうるのではないかと

いずれにせよ、今日においても、たしかに文学というものに対する  
指向は、一定の人びとのあいだで根強く共有され続けているよう  
に思われる。では、それはいったいどのようなものなのか。ひとま  
ずそのような問いを立て、純文学とされる作品群のおもな発表媒体  
である文芸誌を一ヶ月単位で（この版では07年の一月号から六月号  
まで）追っていくつもりであるが、誤解なきよう述べておくと、こ  
こで行うのは、文芸誌に発表された小説をいくつか取り上げ、詳細  
に論じ、比較したりすることではない。むしろ、それらの作品につ  
いての言及や批評、周囲の情報を見ていくことにある。つまり、中  
身というよりは器（理念を取り巻く言説）を眺め、検討し、現在進  
行形の文学ないし純文学といったものをつくり出し、結びついてゆ  
く指向の、その芯にあたる部分を探ることにある。もちろん、必要  
に応じて、個々の小説などに触れる場合もあるけれども、基本的に  
は、それらの質を問うことを目指さず、あくまでもそれらの質を規  
定しようとする環境のほうこそを、見る（ウオッチする）ことが目  
的であり、したがってとくに結論めいたものが用意されてはいない  
ことを、あらかじめ断っておきたい。